



「ときめくことは罪なのですか・・・!?」
 待望の連載再開! 掲載誌「マジキュー」を読む前にぜひ予習してください。第1巻から第2巻まで好評発売中!

石田敦子先生 インタビュー

「とらだよ。」28号での「電撃大王」編集長・ベンツ中山氏の推薦にあるとおり、ヒロインたちの揺れ動く感情を見事に描くその画力と表現力でコアな漫画ファンから熱い支持を受ける石田敦子先生。今回は2度の掲載誌の休刊により、未完のままで終わるかと思われていた「純粋!デート倶楽部」の連載再開を祝して、作品の内容はもちろん、アニメーターから漫画家への転身についてまで、ファンならではの気になるお話しを取材してきました。ぜひご一読下さい!

「純粋!デート倶楽部」石田敦子
 「マジキュー・プレミアム」(エンターブレイン/奇数月30日発売)にて連載再開
 コミックス第1巻～第2巻 少年画報社より発売中

「純粋!デート倶楽部」掲載誌「マジキュー・プレミアム」に関する最新情報はココでチェック!
 <マジキュー・プレミアム 公式HP>
<http://www.enterbrain.co.jp/magical-cute/>

●「純粋!デート倶楽部」キャラ紹介●

榎井朱音 (中央)

本編ヒロイン、明るくまっすぐに生きる彼女、倶楽部でときめきを追究する事を決意する。

谷崎真白 (後列右)

かつては「真城アサー」として大人気子役だったが、ある事件をきっかけに女装という仮面を被る。

高知麗桃子 (後列左)

男性嫌いの彼女、真白を女性と思い、アタックするため倶楽部部員になる。



辻みどり (前列右端)

子供っぽい容姿の彼女、その純感さで本当のときめきにまだ気づいていない。

佐倉本玉音 (前列中央右)

独特のときめき観を持ち、自堕落な生活を送る彼女だが、その冷静な態度の本心は・・・。

桂黄花 (前列中央左)

穏やかな物腰のお嬢様、卒業後に結婚をする婚約者がいる彼女だが、その心には兄への秘めた想いが。

谷崎紫乃 (前列左端)

真白の姉で倶楽部の女社長、女手一つで5歳の子供を育てる彼女、自分のときめいた時間を悔いている。

編集長: まずこの「純粋!デート倶楽部」を描くことになったきっかけを教えてください。

石田先生: 今迄描いてきた作品がどれも暗いとか重いとか言われていたので、ちょっとバカな設定というか、楽しく描ける物を書いてみよう、という事で始めたのがきっかけです。「明るい作品も描けますよ」という所を見せようと思ったんですけど、それでもやっぱり重い雰囲気になってしまいました(笑)。

確かにこれまで経験中絶をしてしまった中学生の話とか、重い設定が多かったですよね。逆に今回は女の子いっばいで楽しさを表現しようと思ったわけですか?

そうですね。ちょっとドタバタで楽しく、今迄と違う雰囲気でも描けたらいいなって思って、まず浮かんた設定を担当さんに相談したんです。でも今迄が今迄なので担当さんも想像がつかなくなったらしく、「とりあえず1本描いてください」と言われて、ネームを上げたのがそのまま連載になったんです。

実際に描き始めてから3話をまったくこなしてしまいましたが、よろしければそのあたりの経緯を教えてください。

以前から2話目の編集部さんから「読み切りを一本描いてもらえませんか?」というお話しはいただいていたんです。それで「いいですよ」とか答えているうちに、1話目が休刊してしまっただけで、その編集部さんから「じゃあ、デート倶楽部をやりますよ」と言ってもらったんです。ただその2話目も掲載1号目のネームを出しているときに休刊が決まっちゃったんです。

そこで終わらせようとか、載せるのを止めようとは思わなかったんですか?

まわりからも「今回は載せないで次に持っていく方がいいよ」とって、アドバイスもされたんですけど、やっぱり誘ってもらって、有り難かったんで、ちゃんと描こうと思ったんです。その後、実はこの作品を引き取りたいという電話が3件くらいあったようなんですが、もう編集部自体がなくなったんで、こちらに伝わってこなかったんです。なんか色々お話を頂いたようなんですが、でもどれも実際に私が受けていないのでわからないんですよ。本当に声をかけてくれた方にはお礼

を言いたいのですが、どなたかもわからなかったんです。そんな状態だったんですけど、エンターブレインさんだけが電話でなく、FAXで問い合わせしてくれました。FAXは紙だから残るじゃないですか(笑)!

それでまわりまわって、2ヶ月後ぐらいに私にそのFAXが届いて、ようやく連絡が取れて引き取ってもらえることになったんです。

再開の目算がなかったとき、例えば西人誌などで出そうとは思わなかったんですか?

休刊になった時、他の作家さんの話を聞いたら、同人誌で出そうとする方、全部描き下ろしてコミックスにする方、あきらめちゃう方、色々な考えの方がいたみたいで、私自身も「同人誌もアリなんですけど」って担当さんに聞いたんですけど、「原稿が貯まればコミックスは出しますよ」と言われたんです。でもそれも100ページ以上の描き下ろしを指すことになるので、「それはキツイな」と思ったんです。でも実際2話目の休刊の時もう続けられないと思いました。

こうした間が空いた漫画の場合、リニューアルして1話から始めたりするなど、再開の方法にも色々あると思うんですが、本当に連載が途切れたところから始まりますけど(19話で掲載誌休刊、20話より再開)、このあたりどうだったんですか?

本当に途中からなんですよね。ありがたい事に。やっぱりちゃんと終わらせたいと思ったんです。幸いな事にエンターブレインさんが途中で結構ですよと言ってくれたので、ありがたお言葉に甘えて、この方向で続けることになりました。

「ときめき」を提供するという設定を決めたのはどうしてですか?

3、4年ぐらいで終わると言われている恋愛サイクル、盛り上がり過ぎて落ち落ちて飽きるまでのサイクルですけど、これが最近では早くなったんじゃないかって友達と話していて、その中で「やっぱり最初の気持ちのままじゃられないよ」という会話をしたのがずっと残っていたんです。自分にも「最初のときめきで恋愛は続けられないよ」というのがあって、みんなもそうなのかなって思ったので、そのあたりを掘り下げてみる事にしました。ただそれをそのまま描くと説教臭くなるので(笑)、ちょっとひねってギャグも出来るような、ドタバタも出来るような、他人から見たらバカな設定

ということで、この「ときめき」を提供するデート倶楽部という設定をたんです。

一人違いますが、女の子だらけにしたのは、やっぱり掲載誌が圧倒的に男性読者が多いからなんですけど、逆に女性誌には載らない作品も思うんですよ。多分女性から見たら、「こんな事はしない」とって思う多いですし、すごい男性側の視点からになっていると思うので、鼻と鼻、痛む印象を受けると思うんです。大学を舞台にしたのは、高校生だとなんとなくなんですけど、あまりきと深く掘り下げてないで、飽きたらもう次に行くような軽さ、今がこれだけいいやって感じになりそうだったので、もう少し逃げた年齢にしようかなって思ったからです。作中に一度結婚している子もいれば、卒業後に結婚が決まってる子もいるのはそうした流れですね。

デート倶楽部の話以外に朱音と真白の恋愛話がありますが、このように入れたんですか?

基本的に一話完結の作品なのですが、なにか一つ繋がっている話もあっていいなと思って。朱音は最初に失恋しているんですけど、その朱音が他の倶楽部メンバーと恋愛を通して、立ち直ったり、落ち込んだり、そういう様子を通して真白との関係を築いていけたらと思ったんです。ただ朱音は他のキャラに比べて一番普通のキャラのせいかな(笑)、なにか話が通まないキャラなんですけど、それでも普通でずっと行きたいというか、読者にも一番近い存在として、他の人の恋愛を助けて成長できるキャラにしたいなと思って。ただその一方で、このままだと朱音と真白はくっつかないな(笑)、うが動きようがないなと思ったんで、2人の間に波を立てるキャラ途中から桃子というキャラを登場させたんです。実際、彼女の存在や行動で、朱音の普通をつつことが出来たん話を動かすことが出来たんじゃないかと思っています。

色々な事情で止まっていた作品ですが、終わり方は変化しましたか?

最後の最後は変わらないです。そこまでの過程というのは多少変えようと思うんですが、最後は変わっていません。最後までプロットもしてありますし、思い通りに行きそうなので、このままやればと思います。連載再開にあたって、なにか新しい展開を行うことも考えとして

■「純粹! デート倶楽部」作品解説■

「あなたはデートをしたことがありますか？」

ナンパではなく、合コンでもなく、身体の関係はもちろんなく手もつなげない、ただ一緒にいてドキドキときめく、そんなデートを提供する不思議なサークル、それが「純粹デート倶楽部」。付き合っていた彼氏に突然振られた朱音は、スカウトされ、この不思議なサークルに入ることになります。一見不思議なその倶楽部には様々な問題を抱えた人からの依頼が絶えません。そんな彼らに「ときめき」を提供する彼女たち倶楽部員、それぞれのスタイルで依頼者の要望に応える彼女たちですが、実はそんな彼女たちも「ときめきの病」の問題を抱えていたのです。失われた「ときめき」に輝きは戻せるのか、「ときめき」にそれだけの価値はあるものなのか、彼女たち一人一人は今日もその問題に向き合いながら、依頼に応じていきます。

「ときめき」を信じない紫乃、彼女の枷は外れると
きが来るのか？



朱音と真白、果たして2人に一体何があったのか...!?



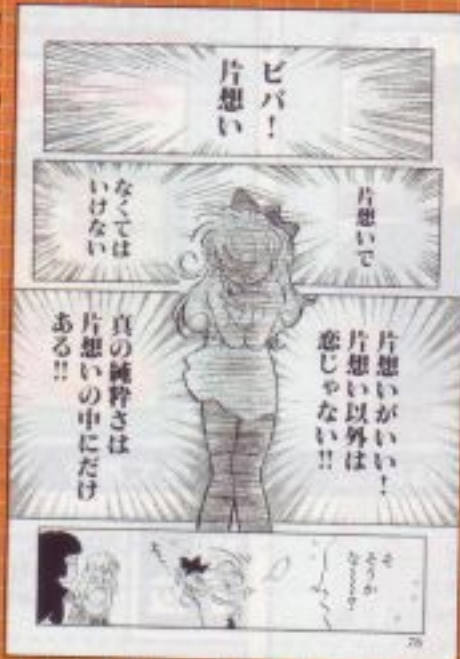
本当のときめきに気づかないみどりに対して他の
部員たちは...?



の植えつけられた虚像、それを振り払うために少年
の取った行動は?



「ときめき」のオーダーは十人十色、今日も朱音
は頑張ります!



彼女が依頼を受ける理由、それは失った「ときめき」
を補充するため



「おどろおどろしいオーダーもたくさんありますよ。」

のかもしれないのですが、ちょうど中断した箇所が明らかにクライマックスに向かっている途中だったので、ここから新しくはできないと思いました。それでも今回からの新しい読者の方もいるので、一話完結の頃のデートシーンも入れないといけないと思ったんで、再開直後の話では、最初の頃のようなデートシーンも入れているんです。それでもあとは朱音と真白を含めて、各キャラクターそれぞれの決着をつけるために描いていくことになりますね。

キャラ設定で気遣っていることがあれば教えてください。

そうですね、この作品では普通の主人公タイプの子に、クールな子、ドタバタした子といった感じで、比較的セオリー通りに作ったんで、誰かに感情移入してくれればと思います。あと裏設定じゃないんですけど、この作品には姉弟対決の一面もあるんですよ。

「ときめき」を信じている、ときめく心を許す真白と、それを絶対許さないという紫乃、全く別の方向を向いている2人にも決着をつけなくちゃいけないんです。男と女で考え方が違うという事もあると思いますが、紫乃の場合は子供もいるんで、ちょっと根深い(笑)と思っています。

紫乃に子供がいることにしたのは、やっぱり大学生ばかりだと生活感がないということもあるんですけど、誰か一人「ときめき」を否定するヒト、それだけの説得力を持ったヒトがいなくてダメになってしまったからなんです。

ストーリー作りで苦労されている点は何かありますか？

エピソード自体は結構浮かぶんですが、それを形にする、如何にデートと結めるかが大変です。ともすれば恋愛観を語るだけで、デートがなくても話が成り立つので、その部分を抜けないように気遣っています。

あと倶楽部の存在自体がかなり現実とかけ離れた存在なので、逆にデートシーンについては誰かが想像できる内容にしないとバランスが取れないんじゃないかと思ったんで、デート自体はなるべく現実的な設定にしています。なるべく紫さんが「あっ、この部分はわかるな」というシーンは残しておきたいですね。

ところで「純粹! デート倶楽部」という名前を決めるのにすごく苦労されたようですね。

直球でこのタイトルを企画書に書いたんですけど、担当さんから「このタイトルで本当にいいんですか」と連絡があって、「デート」と「倶楽部」が付いているのがマズイと言われたんで、「じゃあ、純粹を大きくしたらいいんじゃないんですか」と返したら、「いや、そんな問題じゃないんです」とまで言われたんですよ(笑)。

それでどうしようか悩んで思っただけなんですけど、もう言葉として浮かんでたんで、ちょっと切り替えることはできなかったから、やっぱりこれでいこうと伝えました。

そうしたら今度は編集長まで心配されて、「コミックスになったときのことを考えてください! デート倶楽部と石田敦子が並ぶんですよ、いいんですか!」って、何回も確認されました(笑)。

元々自身について伺いたいのですが、元々アニメーターとして、お名前が通っていたにも関わらず、どうして漫画を描く事になったのですか？

勇者シリーズの「ジエイデッカー」というアニメ作品のキャラデザをやっているときにアニメ誌さんから、漫画を8ページ描いてくれないかということをお願いされたんです。

その企画はキャラデザの人が漫画を描く企画だったので、商業誌で描くことは初めてだったんですが受ける事にしました。それで実際に描いてみたんですけど、その過程で「一人で作業するの面白くない」と思ったんです。

それからまたしばらくして、「シャーマニックプリンセス」という作品でも4ページ、同じ形で描くことになったんですけど、やっぱり楽しかったんですね。それで「漫画っていいな」、「また描きたいな」って、ちょうど思っていたところ角川さんの編集長さんが、その4ページだけしか見ていないにも関わらず、いきなり30ページもくれた(笑)、描かせてもらったのが「いばら姫のおやつ」(短編集/少年画報社)の最後に入っている「天上の丘づめ」なんです。

いきなりヘビーな話で来ましたね(妊娠中絶した女子中学生が主人公)。

そうですね(笑)。どんなの描きたいのって聞かれたとき、口で説明したら、「うーん」って唸られました。

でもその編集長さんとは結婚されていたんで、まだ理解があったんですけど、独身の若い編集長さんからは「ちょっと暗すぎるんじゃないか」と、返されたみたいなのは聞きました(笑)。

でも元々こっちの方向しか浮かばないんですよ。アニメーターの描く漫画って戦隊モノとかメカモノっぽいのが想像されると思うんですけど、どうし

てもこっちの方が浮かばなくて、ヒトの心理や感情を描くのをやってみてかかったんです。

本当に失礼な話なんですけど、自分も「アニメーターの描く漫画なんて」という偏見があって、最近まで先生の作品を読んでいなかったんです。それがあるきっかけで読んでみたら、「えっ、こんな漫画描くの?」って驚いたんですけど、正直、他のヒトもそうした偏見があると思うんですけど、その点は如何ですか？

「アニメーター漫画」という悪口があって、アニメの絵コンテみたいな漫画を描すんですけど、そうはならないように、ちゃんと漫画にしようというつもりで描いています。

アニメーションはどうしても動きを丁寧に追っていくのが商売なので、動きだけでコマを埋めちゃうというか、振り回したら振り回いたただけで終わりとかになるんで、そういうのは止めようと思っています。

アニメーションにはアニメーションのやり方があるんですけど、それは完全に捨てよう。漫画は新人なんで新人のつもりでやろうと思っています。幸いストーリーはアニメでは出来ないモノしか浮かばないですし(笑)、アニメでやりたいモノはアニメで企画を出そうと思っていますので、漫画でしか出来ないモノをやろうと思っています。

アニメ化した時の映像がうかぶ作品もありますが、どうもそういう作品が描けなくて、アニメをやっていたのにダメですね。やっぱり何を描きたいかと言えば人の気持ちなんです。

内容が軽いとされている事については、基本が大島弓子さんをはじめとした少女漫画なんで、男性が読むと軽いと思う漫画もありませんけど、昔から少女漫画って、ああいう内面を掘り下げて痛い所を見せちゃうという所があったので、女性が読むと普通ののかなと思っています。

最後に読者の方へのメッセージをお願いします。

3話追って下さっている方もいると思うんですけど、本当にありがとうございます。えー、必ず終わらせません(笑)。あと連絡が取れなかった編集長さんで、この漫画を引き取ろうと思って、少しでも動いてくれた編集長さんには本当に感謝したいですね。ありがとうございました。

取材日:平成15年7月6日 協力:マジキュー・プレミアム編集部